



## パナソニック 3D対応民生用 AVCHD ビデオカメラ HDC-TM750 + VW-CLT1

フォトグラファー 小山 浩司

今年、8月末についてパナソニックから3D撮影対応の家庭用ハイビジョンビデオカメラ「HDC-TM750」が発売された。基本性能は光学12倍ズームで253万画素×3の3MOSセンサーを採用し、独自規格となる1080/60p記録(放送用の1080/60iの2倍の情報量をもつ)、96Gバイトの内蔵メモリーとSDメモリーカード記録など、従来機であるHDC-TM700のスペックを引き継ぎつつ、手ブレ補正の強化や低照度ノイズの低減など随所に改良点が見られる。

目玉となる3D動画撮影はというと別売の3Dコンバージョンレンズ「VW-CLT1」を装着することで行うことができる。放送用でも3Dコンテンツがまだ少ないなか、実売で約¥4万のコンバージョンレンズを家庭用のビデオカメラに取り付けるだけで、手軽に3D撮影が行えるというのは、いままさらながら非常に驚きである。なお3Dコンバージョンレンズに対応したモデルは、本機と下位機種種のHDC-TM650の2機種のみ。

### 3Dコンバージョンレンズで3D撮影

3Dコンバージョンレンズとカメラ本体の取り付けはねじ込み式で、上部のダイヤルを回すだけで簡単に装着できる。取り付けた後には最初に光軸を合わせる

ための調整が必要となる。3Dコンバージョンレンズを透過した右目用、左目用の2つの映像を正しく、本体側のレンズに映るようにするものだが、液晶画面に表示されるガイドに従い調整ダイヤルを回すだけで簡単に行える。ここで調整をきちんと行わないと、3Dの立体感が低下する原因となるのでレンズを取り付ける際は毎回調整が必要である。

3D撮影は、右目、左目用の映像を2つ並べて記録するサイドバイサイド方式を採用している。3Dコンバージョンレンズが左目用映像信号と右目用映像信号を本体のレンズへ通し、水平方向を1/2に圧縮、横に並べて1枚のフレームとして記録される。そして再生時には水平方向に2倍引き延ばし、左目用と右目用の絵を交互に映し出すしくみである。

実際に撮影してみたが、操作的には通常の2D撮影と同じようにほぼフルオートで撮影が行えてしまう。しかし、3D撮影時は、液晶モニターに映し出される映像が2D表示なので、どのように効果が現れているかは、経験を頼りにするしかなく、ある程度慣れが必要である。

また3D撮影では、ズームは使えず35mm判換算で約58mm相当の画角に固定されてしまうので、狭い室内などでは被写体が限定されてしまう。この点に関して



写真1 3DコンバージョンレンズVW-CLT1。ステレオベースは12.4mm



写真2 HDC-TM750に3DコンバージョンレンズVW-CLT1を装着。爪を合わせて、ダイヤルを回して固定する